

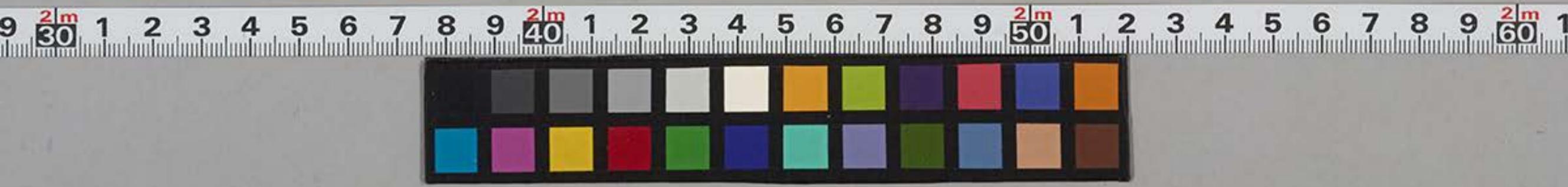
第一章 先驗的反省

カントは、「純粹理性批判」出版の直後に、マルクス・ルツに宛て、斯う書き送つてゐる。「私は純粹理性の二律背反といふ標題の下に述べた所のものから始めても、差支えなかつたのでせう」と。吾々は此の言葉の有つ内容も究めることによつて、「純粹理性批判」の眞精神を明かにしたいと思ふ。

—

カントに依れば、「論理的假象(謬誤推理の假象)は全論理的規則に對する注意の不足から生ずるものである。それ故、この場合には注意が鋭くせられるや否や假象は全然消滅する。これに反して、先驗的假象は既に発見され、其の架空な性質が先驗的批判によつて明瞭に洞察せられる。それによつて總し存い(例へば)世界は時間上起點を有せぬといふ命題による假象の如し」(Cp. 353) 二二に論理的假象と訂置せしめられ

十行 廿四字詰





決はあつたのである。

然も吾々には、解決の鍵が託に与へられてゐる。

「實にその水は、吾々が与へられた凡中の対象を二

種の概念に従つて——即ち一度は現象として、次に、

物自体として解し、了する美に於て——七八三、ハ、七、が此の究

書簡。同一の意志が現象(可視的行爲)に於ては必然的

に自然法則に依り、不自由なものと、自由なものが

か、他面、物自体に属して自然法則に拘束されたものが

故に自由なものと、して考へて、これに矛盾は生

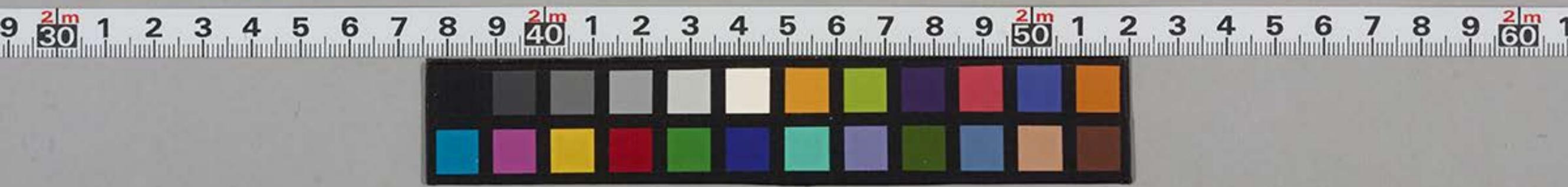
じな(B. XXVニ大)から、<sup>考へ</sup>しかうば、如何にして

吾は対象を、かゝる二種の概念に従つて解し得るかの

再考。   
 二   
 此の由   
 反省概念   
 基本的解答   
 見出し   
 即ち可憐体(物自体)と

と、観念なくして、論理的には比較さず得るが、

Kyoto University







Wittgenstein (Vorlesung)

證論の基礎をなすもの (ガッセルバントとパウエルと等

の言の如く単に「誤謬推理」のいはなくと騰水は「二律背

反」をなすこと。後「反者概念」の多義性に「い」

の一章の從來のカント解釈に於けるが如く単に「い」

ニツの本体論に討つた批判的論述に止る。その意を

まさには純粹理性批判の要諦たること、を明確に示して

本原とて同時に吾々に向つて明かにする。いふこと

の各部分に現れしもの特異性と此の独異な思想法

の根。反者概念の表が「期せざる利益

の「反者」の経験的使用と実験的使用との混同に依る

形而上学の典型として「ラ」ニツの本体論(世界の知性

的体系)を論ずる対象とする。この「い」は「先

験的」反者の先本體論性を解明せんとして「い」

の「い」は「い」の現象の個性化と「い」の誤謬

の「い」は「い」の現象の個性化と「い」の誤謬

の「い」は「い」の現象の個性化と「い」の誤謬

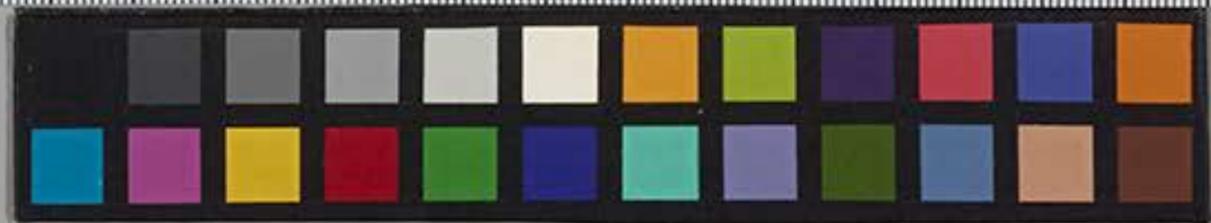
の「い」は「い」の現象の個性化と「い」の誤謬

の「い」は「い」の現象の個性化と「い」の誤謬

の「い」は「い」の現象の個性化と「い」の誤謬

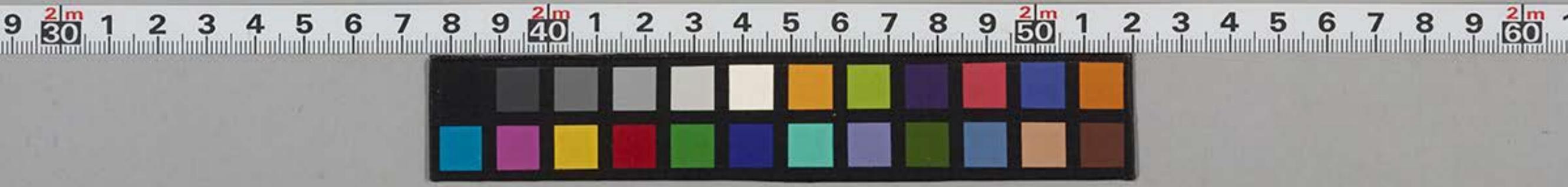
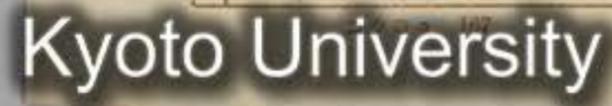
の「い」は「い」の現象の個性化と「い」の誤謬

十行 廿四字



に、斯かる概念の多義性より人々を惑はして誤る原因を作らしむる原因を闡明するは、悟性の眞の限界を決定し確實ならしむるに大なる効果を有することあり(頁336)。と断定し<sup>しるべき</sup>。ここに所謂悟性の眞の限界を決定し確實ならしむること、<sup>實に</sup>、<sup>数学及</sup>自然科学の基礎を確立すると共に他方道徳及び宗教に独自の領域を指定せんとする<sup>批判</sup>の眞精神に於ては、<sup>フタ</sup>らうか。実験的反省<sup>を定義して</sup>の表象が純粹悟性と感性的直観との何れに属するものと<sup>し</sup>て相互に比較せしむるが<sup>区別</sup>する<sup>は</sup>た<sup>ら</sup>ま<sup>し</sup>。 (頁311) <sup>と</sup>し<sup>て</sup>何れかの認識能力に對する所与表象の關係の意識 (vgl. B. 316, 318) があり、その<sup>と</sup>限<sup>り</sup>に<sup>於</sup>て<sup>は</sup>物<sup>の</sup>属<sup>す</sup>る<sup>認</sup>識<sup>方</sup>法<sup>の</sup>政<sup>育</sup> (頁318) <sup>と</sup>言<sup>は</sup>れ<sup>得</sup>る。今ここに、対象に<sup>て</sup>は<sup>な</sup>く、<sup>寧</sup>ろ<sup>と</sup>象<sup>一</sup>般<sup>を</sup>吾<sup>々</sup>が<sup>認</sup>識<sup>す</sup>る<sup>仕</sup>方<sup>一</sup>が<sup>先</sup>天的<sup>に</sup>可能なるべき限りに<sup>於</sup>て<sup>は</sup>關<sup>与</sup>する<sup>と</sup>に<sup>て</sup>も<sup>凡</sup>そ<sup>の</sup>認識を<sup>私</sup>は<sup>先</sup>験<sup>的</sup>と<sup>名</sup>付<sup>け</sup>る (頁25)。と<sup>い</sup>ふ<sup>「</sup>純粹<sup>理</sup>性<sup>批</sup>判<sup>の</sup>緒<sup>言</sup>に<sup>於</sup>ける<sup>有</sup>名<sup>の</sup>言<sup>葉</sup>が<sup>思</sup>ひ<sup>起</sup>す<sup>る</sup>な<sup>ら</sup>ば、<sup>先</sup>験<sup>的</sup>の<sup>反</sup>省<sup>が</sup>先<sup>験</sup>哲學<sup>否</sup>」<sup>を</sup>「<sup>先</sup>験<sup>哲</sup>學<sup>の</sup>完<sup>全</sup>な<sup>理</sup>念 (die vollständige Idee der Transzendental-Philosophie)」と

十行 廿四字



先験的言語の存在  
と原語の先験的  
性  
に  
あ  
ら  
う  
。

ト  
レ  
の  
判  
の  
重  
が  
成  
と  
い  
ふ  
が  
確  
認  
せ  
ら  
れ  
る  
。

先  
験  
的  
反  
省  
を  
テ  
ー  
マ  
と  
す  
る  
反  
省  
概  
念

の  
多  
義  
性  
に  
つ  
い  
て  
い  
ふ  
章  
は  
批  
判  
体  
系  
の  
キ  
ー  
ポ  
イ  
ン  
ト

ト  
で  
あ  
る  
。ト  
の  
思  
ひ  
は  
思  
ふ  
の  
で  
あ  
る  
。

三

吾  
々  
は  
此  
處  
に  
至  
つ  
て  
は  
い  
や  
と  
卷  
頭  
に  
掲  
げ  
ら  
れ  
る  
。

へ  
ル  
ッ  
へ  
の  
言  
葉  
の  
伴  
は  
な  
け  
れ  
ば  
な  
ら  
な  
か  
つ  
た  
條  
件  
、  
即

ち  
最  
初  
は  
先  
づ  
基  
礎  
を  
清  
掃  
す  
る  
こ  
と

に  
此  
の  
種  
の  
認  
識  
の  
全  
体  
が  
其  
の  
構  
成  
の  
凡  
々  
の  
部  
分  
に  
就  
て

明  
瞭  
に  
せ  
ら  
れ  
ね  
ば  
な  
ら  
な  
か  
つ  
た  
。か  
、  
る  
事  
情  
々  
へ  
な  
け

れ  
ば、  
と  
い  
ふ  
言  
葉  
の  
真  
意  
を  
理  
解  
す  
る  
こ  
と  
が  
で  
き  
る  
。即

ち  
カ  
ン  
ト  
は、  
先  
験  
的  
分  
析  
論  
を  
先  
験  
的  
感  
性  
論  
と  
先  
験  
的  
論

理  
学  
と  
に  
分  
け  
て  
感  
性  
及  
び  
理  
性

し、  
感  
性  
は  
何  
も  
を  
直  
観  
す  
る  
こ  
と  
は  
で  
き  
ず  
感  
能  
は  
何

れ  
も  
も  
の  
性  
質  
す  
る  
こ  
と  
は  
で  
き  
ぬ。  
兩  
者  
が  
結  
合  
す  
る  
こ  
と

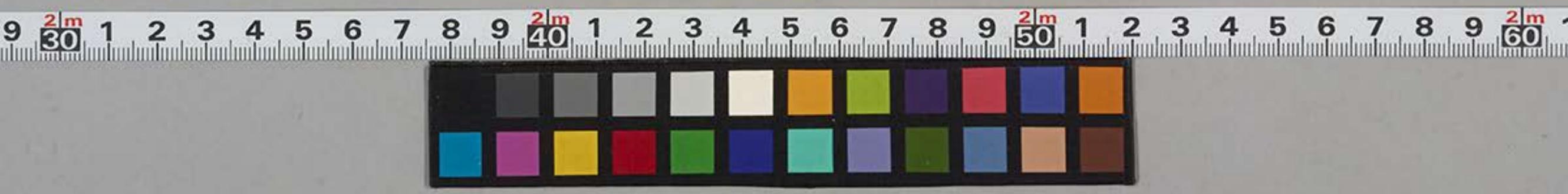
に  
よ  
つ  
て  
の  
認  
識  
が  
発  
現  
し  
得  
る  
の  
で  
あ  
る。  
し  
か  
な  
が  
ら

兩  
者  
の  
持  
場  
が  
混  
淆  
さ  
れ  
て  
は  
な  
ら  
な  
い  
、  
各  
自  
を  
他  
か  
ら  
注

意  
深  
く  
分  
離  
し  
区  
別  
す  
る  
こ  
と  
が  
極  
め  
て  
必  
要  
で  
あ  
る。  
こ  
の

十行 廿四字

Kyoto University



吾々が感性一般の規則の學即ち感性論と悟性一般の規則の學即ち論理学とを區別する所以である(以下同)。

へて後々の末尾に於て先驗的反省の立場から此の二領

域の關係を明かにし、其の事によつてけいりて先驗的

辨證論の對象たる先驗的假象、<sup>特に</sup>勝れぬ二律背反解の明

の主要地を飛越呈し得たのである。先驗的反省が、直接に

概念を得しとして対象自身に因するものにはなく、

先づ吾々がそのものと概念に到達するところでは、

主観的制約の発見に着手する所の心性の状態(Reinhold)

(勝れぬ筆者)であるから、それは「吾々の概念の可種

の連結の、主観的必然性が物自体の限定の各観

的必然性と看做されることに起因する所の先驗的假象

(B.353) 勝れぬは二律背反を解く鍵である。その故に

「純粹理性批判」の從つて又「純粹理性批判」が形而上學に

確固たる基礎をなすべしと試みられたものなるは、形

而上學の礎石であるからなない(である)カントによれば、

それは實に「物に關して何等かの先天的判断を下さん

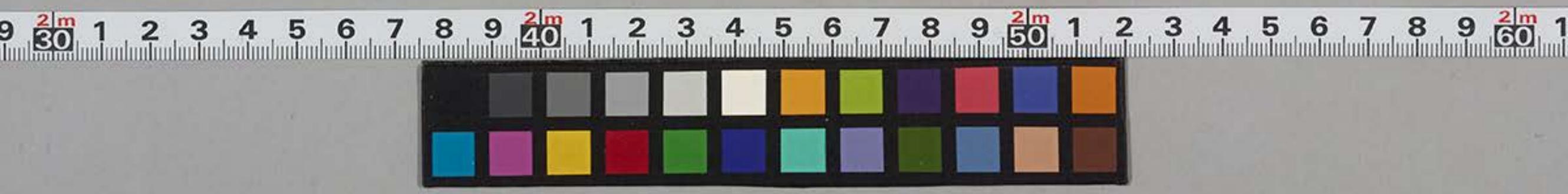
とする者の免れ得ない義務(B.281)」であり、「吾々の表象

に關するあらゆる他の論述に先立つ最初の向題(B.316)」

たるべきであった。

十行 廿四字讀

Kyoto University



第二章 先験的的定位

哲学は、生の諸契機を抽出し、それを体系的に把握す

ることによつて生の本質を闡明する。といふことに其

の根本的な課題を有つてゐる。その根本、哲学史

は、この体系的把握の努力の跡を対立的二領域を根本

的に峻別する二世界論の展開に於て示されてゐる。カントは、

経験一般の可能性の制約は同時に経験の對象の可能性

の制約であるといふ斯の有名なコペルニクスの宣言に

よつて、パルメーニデス以来墨守されて来た存在

(Sein) と認識 (Denken) (Erkennen) との二世界論を

超克し、<sup>かくて獲得した</sup>綜合世界を<sup>再び</sup>眞料 (マテリアル) と形相

(Form) との二領域に分割して先験的ニ世界論を樹立し

た。現代の物理学者達<sup>の</sup>コペルニクスの宇宙觀を地盤

として建設せられた<sup>た</sup>物理的世界像を仰ぎ見つゝ、

吾々はカントによつて獲得せられた<sup>た</sup>経験表象と對象(存

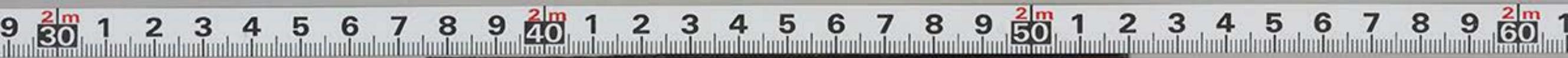
在)との同一性を基礎前提として哲学の本来的課題を果

すべし世界定位に従ふ<sup>た</sup>ようと思ふ。<sup>この物理表象</sup>のたりにコ

ペルニクスのにおける<sup>た</sup>原初形態がケプラー・ニュートン等

十行 廿四字詰

Kyoto University



によつて数学的の論證を以てするに  
 はカントに於ける経験と対象との一致といふ革命的提  
 題が既にゲシュタルト心理学、量子力学等によつて其の  
 当性を確保せらるゝる。心障りのことである。

註

i. ゲシュタルト心理学 (佐久間譯)

「私の物理的生活体内に影響を及ぼす物理的对象は、  
 る波瀾を生活体内におこさせるが、その終局の結  
 果が直接経験における私の眼前の物なるのである。

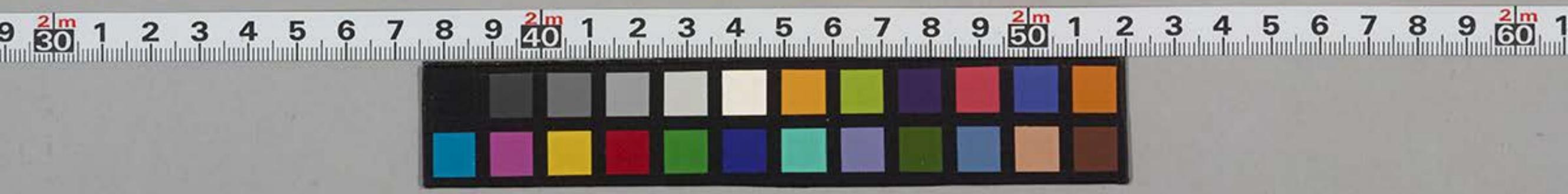
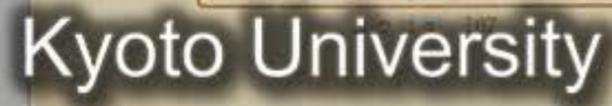
「私の物理的生活体内の過程に依存する幾分は客観  
 性の特色をもち、一方同じ生活体内の他の過程に  
 依存する他種の経験は主観的の特色をもち、」

「物理的对象の物理的特質を研究する際に用ひらる  
 物理的装置は、私の現実の経験の客観的部分にあり、  
 予小による測定の結果は、私の現前の客観的経験に  
 ついてなされるに止り、決して物理的出来事なり  
 くに報告するものではない。

ii. 石原純 「物理学概論」

「波動方程式は対象が或る場所存在する確率を規定  
 する波動函数の變化を示すものになすから、」

十行 廿四字



のり  
 観測者は測定以前の対象の状態を知ることができない  
 対象は常に一つの新たな状態に持ち来たさねる  
 を要するのり  
 器械の反作用が不可避的に行はれ対象の状態  
 要とするのり  
 物理学者は対象の客観的状态を測定によつて知るた  
 めに必ず対象からの作用を判断すべき測定器械を必  
 要とするのり  
 存在の「真の意味を示すのり」  
 観測に於て  
 測結果は、一つの状態即ち対象を指示するのり  
 が、それは決して現象自体を指示しはしない  
 二とは量子力学に依つては「二」の「二」の  
 観測  
 観測結果は、一つの状態即ち対象を指示するのり  
 が、それは決して現象自体を指示しはしない  
 二とは量子力学に依つては「二」の「二」の  
 観測  
 観測結果は、一つの状態即ち対象を指示するのり  
 が、それは決して現象自体を指示しはしない  
 二とは量子力学に依つては「二」の「二」の  
 観測

十行 廿四字詰



存在とは自己の相関者一般を意味する概念である。

今、自己を『心的作用の体系的總体』として規定せば、か

ゝる自己はたゞ表象にのみ関係するが故に (vgl. A. 105

吾々とははるはるはたゞ吾々の表象の多様のみである、

表象に對應するかの X 対象は吾々のあらゆる表象と異

つたものなりければならぬから、吾々とはつては無で

ある。一、存在論は表象以外の何者をもその研究対象と

するとはできな。可生の諸契機を抽出してそれを体

系的に把握するといふことは、表象を其の本質態に於

て分析的体系的に把握するといふことに外ならぬ。の

であるから、吾々の従事せんとする研究は、当然存在

論といはれねばならぬ。であるうが、それはカントに

よつて獲得された先験的基礎に立つ以上、決してア

ストイレリス的スコラ的存在論ではあり得ず、詳しく

は先験的存在論といはれねばならぬ。

③

以上に於ける吾々の所論は、存在即表象と考へる矣

十行 廿四字詰

Kyoto University





泉(555)に「<sup>2</sup>」<sup>1</sup>は「<sup>2</sup>」<sup>1</sup>なるもの。實に時空性は、吾々の

表象の本質に属するものなり。故にそのは、表

象の本質態の先驗的なる攻究を俟つては、いれど体系的

に把握され且展開され<sup>るべきもの</sup>であるが、そのことに上

つてまことに先驗的存在論の基礎を成さねばならぬ<sup>べきもの</sup>。

所以、表象の時空性を表明する時空概念の体系的な

把握と展開とに先行すべし。表象の先驗的なる攻究は、

前章の考察によれば、先驗的反省以外何者によつて

なされることか出来ぬ<sup>べきもの</sup>なり。かくして、先驗的存

在意識は次の如く明確化され得る。先驗的存

在論は、先驗的反省の立場に於て、表象の本質たる時

空性をその純粹なる固有性に於て把握し且それを普遍

的必然的に性格づけることを基礎として要する<sup>べきもの</sup>。

二

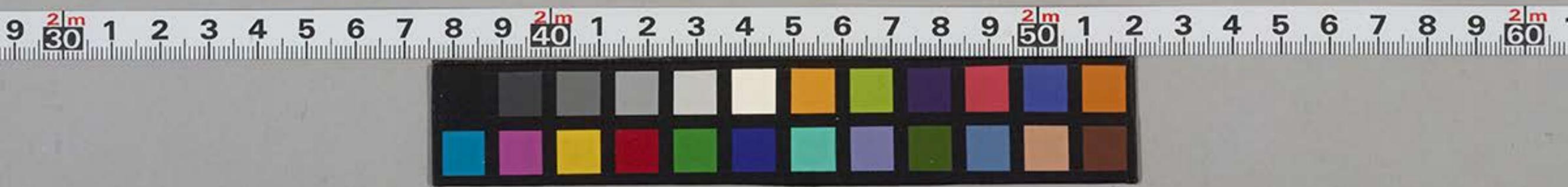
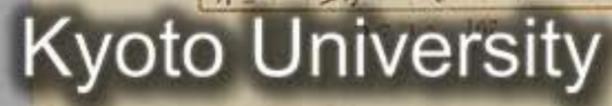
先驗的反省の<sup>視</sup>向は、第一に、表象をその直接態に

於て顯示する。人間の生の直接的にして且具體的な

性格は先づ人間の生の運動として規定せられ、<sup>層</sup>流動

を意味する言葉によつて表現せられ来た。古代に於

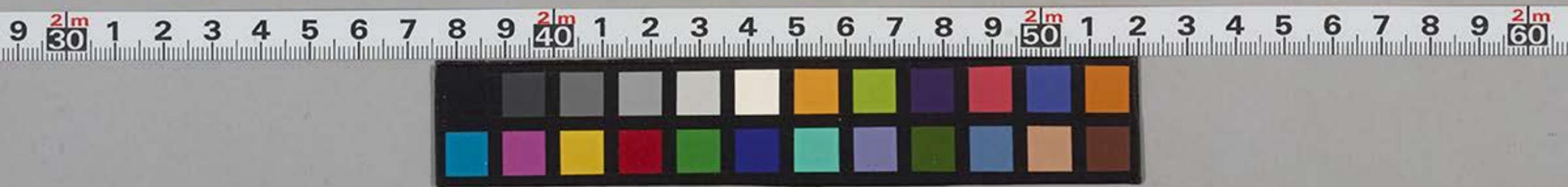
十行 廿四字書



こへラクレイトスとは Taylor peck と呼ぶ。近くはジェー  
 ムズが Stream of consciousness と名付け、ベルグソ  
 ンは と称した。然るに、反省の ~~視~~ 向は直に  
 この直接なる意識経験の対象化即ち表象の同接態とし  
 この意識を顕示する。  
 亦二に、直接なる意識経験 (Bewusstsein) からは内容  
 意識 (Inhaltsbewusstsein) と自己意識 (Selbstbewusstsein)  
 認識 (Erkenntnis) からは注意 (Aufmerksamkeit) と反省 (Re-  
 flexion) なる二契材が抽出せられたる。  
 (註)

意識は、内容的多様を一つの生命性を以つて相互に  
 浸透し、いはば一つの流れとする。  
 認識とは、客体に關係する表象があり、注意によ  
 つて捉へられた個々の表象が如何にして一つの意識  
 の中に把握されたかを知る所の反省によつて、  
 多数の客体に共通なる表象たる概念を看出する。  
 亦三に、意識作用一般の相關者として、自己に屈す  
 る存在 (Zuständiges Sein) とその特性を以つて主観 (Sub-  
 jekt) が、其の二契材たる内容意識及び自己意識の

十行 廿四字結



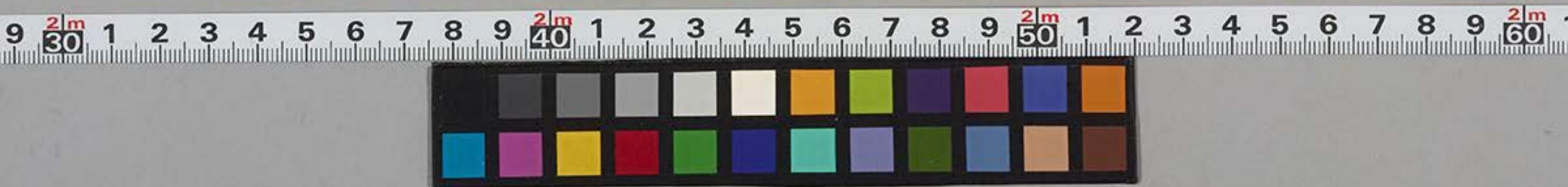
に於て外的なるもの (das Außere) といふ特徴をもち、  
 内容意識と注意との相関者たる存在の顕在態 (Explicite-  
 tum) は資料 (Materie) の名の下に被限定者 (Bestimmbarkeit)  
 として、自己意識と反省との相関者たる存在の潜在態  
 (Implizitum) は秋相 (Form) の名の下に限定者 (Bestimm-  
 ung) として特性付けられる。

三

先験的反省は、表象の本質態を、以上の如く直接態

と「間接態」顕在態と潜在態とに於て、体系的に把握し  
 且展開するが、此の事を土台とし、其の上に築かざるべ  
 き時空概念の体系(一)の才二段を参照は、表象全般に  
 向けられる先験的反省の視向そのもの、特性を、内的  
 者、外的者、被限定者、限定者といふ其の相関者との  
 関係に於て把握し、かくて得らるべき反省概念の体系  
 に則つては、いづれ展開せしめらるる。  
 先験的反省の視向は内的者即ち主観一般に向けられ  
 る限りに於て相次 (Nacheinander) として、殊更に主観  
 に於ける受容性又は自発性に關係せしめられる時には

十行 廿四字



矛盾 (Widerspruch) 又は一致 (Einstimmung) として特性

づけられる。之に對應して外的者即ち客観一般に向

けられたるに於て相並 (Nebeneinander) として、殊更に

客観に於ける偶然性又は必然性に關係せしめられたる時

には差違性 (Verschiedenheit) 又は一様性 (Einerheit)

として特性づけられる。而して矛盾及び差違性は被限

定者即ち資料に向けられた夫、内的及び外的なる視向を

又一致及び一様性は限定者即ち形相に向けられた夫、

内的及び外的なる視向を表明する。かくて、大きくは

相次と相並、更に夫の二契材としての矛盾と一致、

差性と一様性といふ諸概念を以て反省的視向の本質態

を体系的に把握し得た吾々は、ここにはいめて時空概

念体系の構成素地を見出たのである。

四

相次と一様性の状態は時間継起 (Zeitsukzession) を、

其の二契材たる一致及び矛盾は時間凝合 (Zeitern-

stimmung) 及び時間内容 (Zeitinhalt) を、その相違者

として指示し、その水に訂して相並といふ心性の状態は

十行 廿四字



時間系列 (Zeitreihe) を 其れの一様性及び

可差性 (可時間順序 (Zeitordnung) 及び可時間項 (Zeitglied)

を夫々の相関者として指示する。時間継起は存在乃至表

象の時間性を示す概念である。内的者

即ち主観の非可逆性も、その二契材たる時間内容及

可時間凝合は、その異質的多様性 (heterogene Vielfach-

heit) 及び強度的単一性 (intensive Einfachheit)

をあらわす。次に時間系列は時間性を示す概念である。外的者即ち客観の可

空間性を表明する概念である。可逆性も、その二契材たる時間項及び時間順序は、その

逆性を示す。その二契材たる時間項及び時間順序は、その

の等質的数多性 (homogene Vielheit) 及び延長の統一性

(extensive Einheit) をあらわす。その直接態にありて

は、時間凝合、直接態にありては、時間秩序としての性格が

示されたる潜在態は、一般的には、可連続 (Dauer) として、

之に対し、直接態にありては、時間内容、直接態にありて

は、可時間項としての性格が示されたる顕在態は、可一般

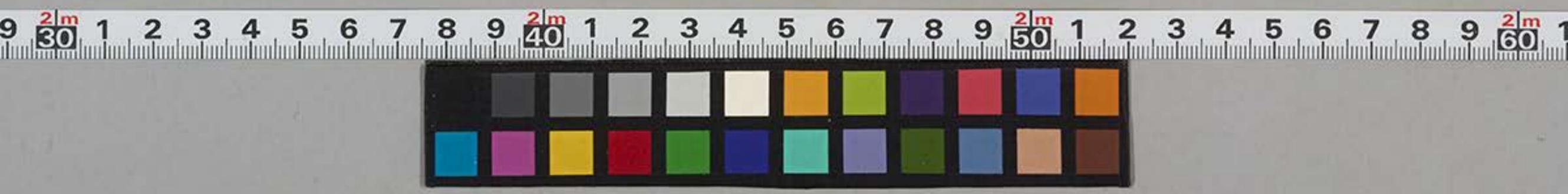
には、可瞬間 (Moment) としてあらわす。

(註)

ベルグソン 時間と自由 (服部紀譯)

「持続」に「時間」は可能な二つの概念がある。一つは

十行 廿四字結



らゆる混入物のないもの、  
 念が介入するものがある。全く純粹な持續は、自我  
 の生きていることに身をまかせ、現在と前の諸状態とを  
 分別するのを止める時、意識状態の繼續のとりかた  
 である。(マヨウ)。

持續のうちでの繼續の順序(秩序)につき、またこの順  
 序の可逆性について言ふとき、問題となる繼續は、  
 、、松りの混入した純粹の繼續であるが、それと  
 も分たれ並べられたる幾項をも同時につかむこと  
 の出来るやうに空間に展開された繼續であるか、答  
 へは疑ひを容れない。まづ項を区別し次に項の占め  
 る位置を比較しない。これは、項の間に順序をたてるこ  
 とは出来ない。つまり項は、多数の同時の別々の  
 もつとし、知識される。一言で云へば、項は並べら  
 れるものがあつて、繼續するもの、うちには順序がたて  
 られるならば、繼續が同時になつた空間のうちには投寫  
 されることである。(マヨウ)。

大畧々の分析からして、時間性が生の直接態の本  
 質であるのに対して空間性がそれの直接態の本質

があるに、それが明かである。

十行 廿四字

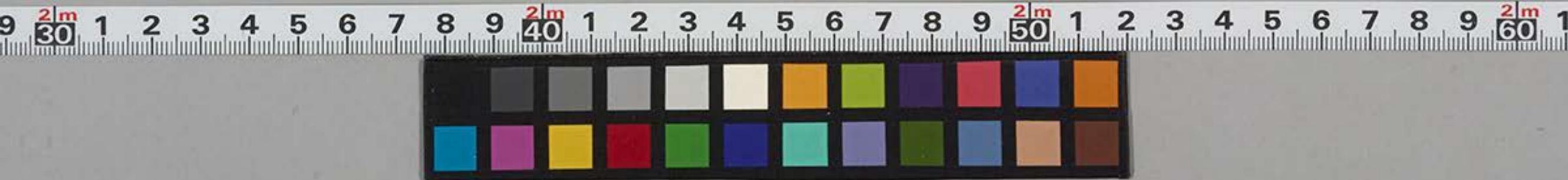
Kyoto University



先驗的反省による斯くの如き時空概念の体系的顯示  
 の可能性は、時空性が表象乃至存在の本質に属するか  
 かりにありて、表象乃至存在の本質態が絶対的な内在  
 的聯関をなしてあることに基くものべあらねばならな  
 い。かゝる内在的聯関は、一見此の聯関とは没交渉に  
 あるかゝり如く考へらるる存在即ち普通に超越者と呼ば  
 れてゐる所のものをその水の該聯関内への導入の動  
 機づけといふは、亦た自らその体系内に則つて  
 亦ち指定する。このことは、人間の有限性、言ひ換  
 えれば吾々の経験が本質的に有限であるためにそれか  
 關係を有する且相共に或る統一を形成する所の他者を指  
 示するといふこと、に基くものべあらねば其の有限  
 性は、個性といふ意味において主体的独自性の行爲に  
 於ける自發を予想してのや、このことを言はしめる元  
 分なる根據となるものがある。こゝは所謂超越者は如何  
 に動機づけられ、且如何様に特性づけられ、であらう  
 か。

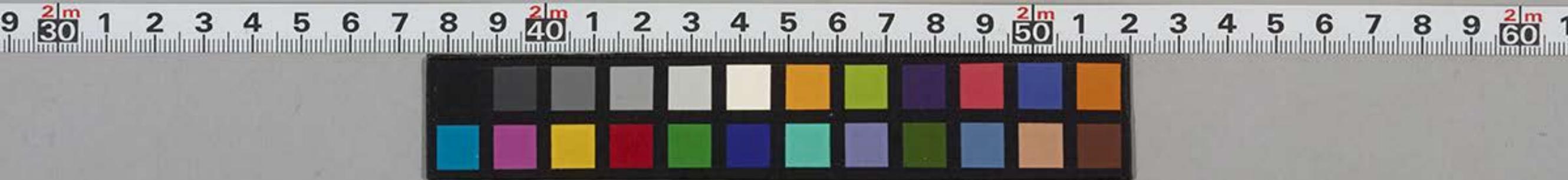
十行 廿四字書

Kyoto University



絶対的な内在的聯関の体系に表明すべき  
 時空概念(空間概念は、空間が時間の向接態と考へられ  
 るかきりにおいて、時間の表現に従はすかぬならな  
 かつたのびりか)は、所謂超越者の該聯関内への導入  
 の動機づけも概念的に表明すべき規準となすべし。  
 かくて吾々は言ひ得る、時間内容は純粹内容(Reiner  
 Inhalt)即ち内的未顕在態(innere, Präsenzium)と、時間  
 項は純粹項(Reines Glied)即ち外的未顕在態(äußere,  
 Präsenzium)と大體規定の顯在態(bestimmbarer Explizitum)  
 の彼方に指示し、時間凝合は純粹凝合(Reiner Zusammen-  
 halt)即ち内的絶対隱在態(innere absolute Implizitum)  
 と、時間秩序は純粹秩序(Reine Ordnung)即ち外的絶  
 對隱在態(äußere absolute Implizitum)と、未相對的隱在  
 態(relative Implizitum)の彼方に指示する。と。

十行 廿四字詰



第三章 先験的的定位因

カントは「量」の考へを哲学に應用する討議と題し、論文に於て、「数学ではよく知られぬが、哲学では強んど使はれぬが」一々の概念を哲学に關聯させ考察し、そのことに依つて、彼の主著たる「純粹理性批判」の根本的課題を先天的综合判断の原理と記号的に把握し得る。本来的に有限性に纏綿せらるる吾々人間は、神をも摩する崇高な理性認識に於ては、視象性も其の明證地盤として要求する。<sup>\*</sup>吾々の從つた先験的存在論の対象たる表象の本質態が空間的に現象化す水且そのものが一定の原理によつて規整せらるるために、水が空間の原理に從つて再構成す水收ばならぬ。幾何学は永き「史」の裡に空間原理の深みをも驚くべき明晰さをも以て照出し、其の最も發展せる体系は斯かる再構成のため、標本も其處から選ばるに何等の躊躇も早へた。幾何学の前提が空間であるのに對して先験的存在論の基礎前提は存在を表象があらざるそのことは比論的にのみ可能なりとあるが、

十行 廿四字體



此の様にして構成せられた現象的体系はまた此論的に  
は其の空間原理に従ふことが許されたであらう。

\*

「書ハ言ヲ盡サズ、言ハ意ヲ盡サズト。然ラバ則チ聖  
人ノ意ハ、其レ見ルベカラガルカ。聖人象ヲ立テ、  
以テ意ヲ盡シ、卦ヲ設ケテ以テ情偽ヲ盡シ、辞ヲ繫  
ケテ以テ其ノ言ヲ盡シ、爻ジテ之ヲ通ジ以テ利ヲ盡  
シ、之ヲ鼓シ之ヲ舞シ以テ神ヲ盡ス。」  
(繫辭上傳第十三章)

一

先驗的反省の主体は純粹なる先驗的自己であり、

此の相関者は、既に述べた如く(第二章三) 内的者

外的者、被限定者、限定者なる特性を有つ存在であり、

内的者及び外的者は主観及び客観といはれ、被限定者

及び限定者は質料及び形相と名づけられる。換言せば、

純粹なる先驗的自己は、主観——客観、質料——形相

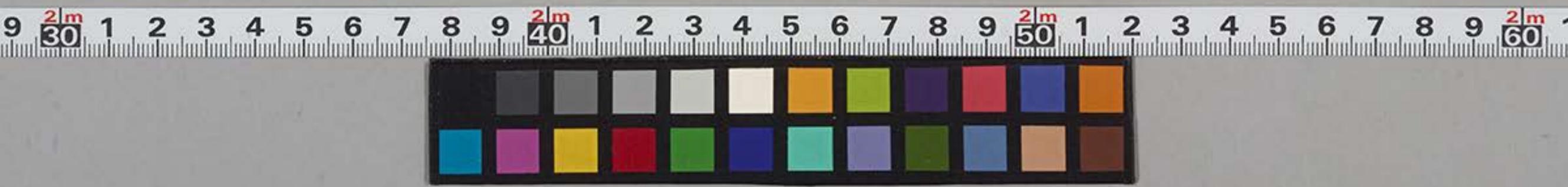
と、二方向の線に沿つて振がりをもつべき本質的可

能性を藏する。嚮に「心的作用の体系的總体」として規定

せられた自己とは、かゝる振がりに於て捉へられた所

十行 廿四字詰

Kyoto University



の經驗的自己がある。かくて、經驗的自己の内実たる  
 表象の總体は、<sup>主観</sup>主観——<sup>客観</sup>客観、<sup>質料</sup>質料——<sup>形相</sup>形相と、<sup>二</sup>二  
 の軸に沿って、<sup>直接態</sup>直接態と<sup>間接態</sup>間接態、<sup>顕在態</sup>顕在態と<sup>潜在態</sup>潜在態と  
 に於て顯示され、いは、<sup>二</sup>二に於て<sup>二</sup>二の本質態に於て經驗的還元  
 を施されることができたりする。二に於て<sup>二</sup>二は、  
 表象の本質態を<sup>二</sup>二次元的連續体として規定しう  
 る。  
 斯くの如く規定せられた表象平面に、<sup>主観性</sup>主観性(1)——  
<sup>客観性</sup>客観性(2)、<sup>質料性</sup>質料性(3)——<sup>形相性</sup>形相性(4)を軸として直交座標  
 系を想像せば、任意の表象を存在を代表する点Aに  
 は、其の直角座標(x, y)が対応する。かゝる表象空間に  
 於て經驗的自己の遠心性を表すものとして、<sup>一</sup>一つのベク  
 トルを考へるとき、それは<sup>一</sup>一つの有向線分<sup>↓</sup>を表す水  
 平行移動によつて<sup>↓</sup>と重ね合し得る一群の有向線  
 分は、何れも<sup>↓</sup>と同一のベクトルを表す。之等の有向  
 線分と同じ向きをもち同じ長さをもつた有向線分<sup>↓</sup>を、  
 經驗的自己を表す所の座標原点を通つて引けば、<sup>A</sup>A  
 は定點となる。即ち經驗的自己の遠心方向の特性換  
 言せば、經驗的反省の特性によつてその水の相関者たる表  
 象は存在の性格が決定せられる。(1圖参照)

十行 廿四字

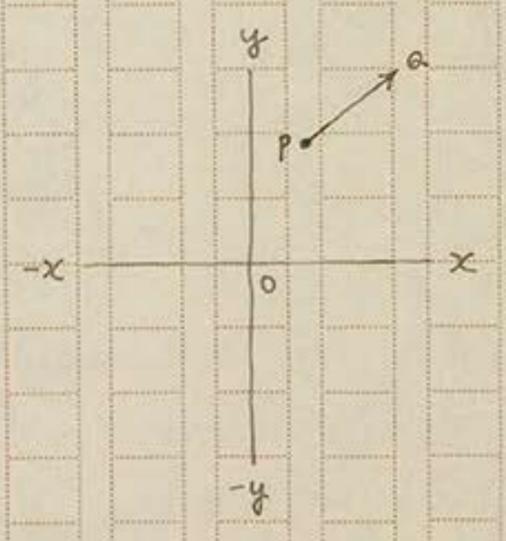


参照)

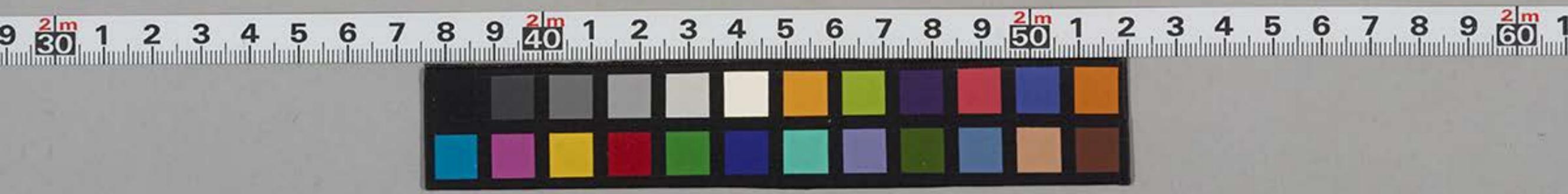
した力と  $\vec{a}$  によつて表される力との合力を示す。(口図)  
 做す水得る。かくこの力学的には、 $\vec{a}$  は  $\vec{a}$  によつて表さ  
 置、又は  $\vec{a}$ 、 $\vec{a}$  を  $\vec{a}$  とする平行四辺形の対角線と見  
 B に一致する迄平行移動する時に、点 A の到達すべき位  
 はベクトル  $A + B$  を表し、点 C は  $\vec{a}$  に沿つて O が  
 とせば、C の座標は  $(x, y, z)$  であるから、有向線分  $\vec{a}$   
 する迄平行に移動する時、点 B の到達すべき位置を C  
 $\vec{a}$  と表すことができる。  $\vec{a}$  も  $\vec{a}$  に沿ひ O が A に一致

表せば、ベクトル  $A$  とベクトル  $B$  との和は  $A + B$   $(x, y)$   
 が表し、其の成分を  $(x, y)$  とし、 $\vec{a}$  の成分を  $B(x, y)$  と書  
 $y$  —  $y$  軸に關して対稱の關係にあるベクトル  $\vec{a}$  を  $B$   
 次にベクトル  $\vec{a}$  を  $A$  と表し、其の成分(点 A の座標)を  
 $(x, y)$  とし、 $\vec{a}$  の成分を  $A(x, y)$  と書表し、 $\vec{a}$  と対稱

(イ圖)

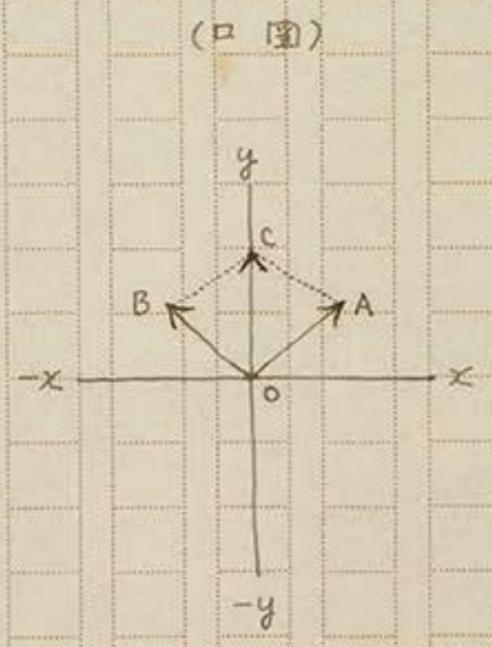


十行、廿四字詰



の対稱点Bは、一致として特性づけられた先験的反省  
 の視向の相関者たる時間凝合を代表する質点として規  
 定すべし(このことは五々々の選定した表象乃至存在座標系  
 の軸の性格本質<sup>とらえかた</sup>点A及び点Bの座標が示す意味の決定  
 にもとづくのである)、原点O及びA、Bを三つの頂点と  
 する平行四辺形の第四頂点たる点Cは、その座標<sup>(H, X)</sup>  
 によつて、<sup>(H, X)</sup>「持続的時間凝合」に於ける瞬刻的時間内  
 容の多様として時間継起を示すであろう。  
 斯くの如くして、吾々が前章に於て行つた先験的定  
 位は次の図の如くは視象化され得るものがある。(一)参照

今、点Aを「質点」として特性づけられた先験的反省の  
 視向の相関者たる時間内容<sup>(H, X)</sup>を代表する質点とせば、之



二

十行 廿四字

